

## 主の教会を建て上げるための 新しい生き方

エフェソ4章17～32節  
2022年10月2日  
松田 基子 師

使徒パウロは神様の御心は、全人類の救いにある事を知ると、異邦の地中海世界に出て行って、イエス・キリストによる神様の救いを述べ伝えました。心から真理を求める人々は、イエス・キリストを信じ、洗礼を受けて教会員になりました。しかし、真実な生き方に憧れて入信したものの、これまでの長い生活習慣から、抜け出せない人もおり、エフェソ地方の教会にも色々な人がいました。そういう人たちも、せっかくイエス・キリストの御救いを受けたのですから、その救いを失う事があってはなりません。パウロが常に祈り、願ったことはイエス・キリストを信じ、御救いを受け入れた人が皆、その人生を、キリストを頭とする教会の一員としての務めを果たし続け、天国の門を潜ることです。

この時、パウロは、ユダヤ教指導者達の陰謀により、牢に囚われの身でありました。その為、教会への願いを手紙に書きました。エフェソの信徒への手紙4章1節で、パウロは「そこで、主に結ばれて囚人となっているわたしはあなたがたに勧めます」と言っています。パウロは見ゆるところ、囚人として牢に繋がれていましたが、彼はキリストの囚人として、キリストに結ばれている事を誇りとしていました。彼にとっては、イエス・キリストに結ばれることこそ、人生の最大の喜び、誉れでした。

パウロはイエス・キリストに結ばれた、キリストの囚人としての誇りをもって、エフェソ地方の信徒さん達に呼び掛けています。「神から招かれたのですから、その招きにふさわしく歩みなさい」と。ここで考えたい事は、『神様は何故、御子の命まで十字架に架けて人類に救いの道を開かれたのでしょうか。』神様の御心は、人類を永遠の滅びから救う為でしたが、神様は、

『人間が苦しむのは可愛そうだから』と、ただそんな感傷的な思いで、御子の命まで与えられたのではありません。神様が創造された人間は、神様の似像に創られ、聖なる愛をもって、造り主である神様に応答し、聴き従って生きるために、命を与えられ、この世に送り出された者です。それなのに、自分を絶対化して神様に背きました。その自己中心から罪を産み出しました。罪の結果としての永遠の滅びです。絶望の淵から救われたのは、なお罪に止まって、好き勝手に生きるためではありません。神の像(かたち)の回復こそ、神様が御子の命まで与えて開かれた救いの道でした。

神様はその為に、キリスト者を招かれたのです。ですから、キリスト者になったならば、先ず神様が招いてくださったことに感謝し、神様の御心に聴き従う事です。それが具体的にどういふことかが2節から記されています。

「一切高ぶることなく、柔和で、寛容の心を持ちなさい。愛をもって互いに忍耐し」と勧められています。一切高ぶらないという言葉は、口語訳、新改訳、協会共同訳は、共に「謙遜」

と記しています。何れも、謙遜、柔和、寛容をセットにしています。謙遜とは、高ぶらない事です。つまり、

『自己の価値に相応しく取り扱われる事を求めず、それ以下に取り扱われても意に介さないこと』

です。柔和は、

『他人の弱点や、不完全さに対して、これを労(いたわ)る心です。』

寛容は、

『自己に受けた被害に対して、怨念(おんねん)や復讐(ふくしゅう)の念を抱かないことです。』イエス様の生き方そのものです。人間が互いに尊び合うために必要な事が

『謙遜、柔和、寛容』

です。これを支えるのが、愛による忍耐です。これらは人間に最も求められる資質ですが、その上で、人は関係性で生きています。一人で生きているではありません。

パウロはそこで、キリストにある人間関係を築

いていくために、3節に、

「平和のきずなで結ばれて、**霊による一致を保つように努めなさい**」

と勧めています。謙遜、柔和、寛容、愛に依る忍耐の働くところに争いはありません。平和そのものです。しかし、その様な品性は人間の努力で生まれるものではありません。その為に必要なことが、**霊による一致**です。では、**霊による一致**はどうしたら得られるのでしょうか。

4節に、

「**体は一つ、霊は一つです**」

と記されています。何のことを言っているのでしょうか。結論から言いますと、4章の標題に記されています、

「**キリストの体は一つ**」

を言おうとしているのです。キリスト者はキリストを信じ、キリストに結ばれた事によって、教会の一員になりました。その教会は、イエス・キリストを頭とする、キリストの体なのです。**教会はただの人間の集合体ではありません。キリストの体**です。体とは不思議です。その器官、部分、部分は数え切れない程多いのに、要らないものは何一つとしてありません。全身に同じ血液が巡り、有機的に命に生かされていて、皆全て関係し合っています。そこには秩序と調和があります。教会の望むところは、**キリストを頭として**、一人ひとりが部分、部分となり、助け合って成長することです。**そのために重要な役割**をしてくださるのが**聖霊**です。

**聖霊**は神の霊、キリストの霊として、**人間自身では変える事の出来ない人間の心の核**、その本質と人格の座に**内住**して、その生き方の根本を聖めて、**思い、意志、行動に変容を与え、人格を創り変えて**くださるお方です。教会が建てあげられて行く為には、この**聖霊による一致**、つまり皆、**聖霊の支配に明け渡す**ことが必要です。

**教会は神の国を先取りしているところ**です。やがて神の国に迎えられるのです。この希望に与るようにと招かれています。そして**キリスト信仰の一番大切なこと**は、

『**主は一人**、即ち、自分の全存在を掛ける主は**イエス・キリストただお一人**です。その方を信じる信仰は一つです。キリスト者は皆同

一の信仰により、『**イエスは主なり**』との信仰告白で、同じ洗礼を受けて**キリストの体に繋がった**のです。』

その事をしてくださったのは、万物を創造された父なる神様、唯一の神様です。このお方は詳訳聖書に依りますと、

「**万物の主権者であり、全てのものを貫き、また、わたし達全ての者の中に住んで居られるのです**」

とあります。神様は**天地万物の全てを見守り、支配して居られる事**を教えてください。

キリスト者とは、その様な絶大な恵みに浴している存在なのです。パウロは信徒さん達が、その事を自覚して、自分のためではなく、キリストの体なる**教会の成長に尽くして欲しい**と願っています。その為には、一人ひとりが変わらなければなりません。17節から、標題には、

「**古い生き方を捨てる**」

と記されています。彼らは、キリスト者となる前は、どの様な生き方をしていたのでしょうか。

パウロはその彼らに

「**異邦人と同じように歩んではなりません。彼らは愚かな考えに従って歩み、知性は暗くなり、彼らの中にある無知とその心のかたくなさのために、神の命から遠く離れています**」

と言っています。

パウロはここで、なにも異邦人を非難しているわけではありません。

『**神様を知らない人間の姿はこの様なものです**』

と言っているのです。教会員は今や神様に見出され、キリストを信じる者になったのです。それはとても大きな変化です。この世の者から、神の国の者に所属が変わったのです。その事をしっかり自覚して、今まで通りの生き方をしてはいけないのです。神様を否定した人間は自らを頼みとして生きています。詳訳聖書では、

「**その心の邪悪さのままに**」

と訳されています。人は神様から離れたなら、人間を邪悪さに誘惑する勢力に結ばれる以外にないのです。

世の勢力に結ばれた彼らは、

『これが、人間の本当の生き方だ』  
と思い込んでいるのですが、実態は18節に記されている通りです。岩波訳では、

「彼らは彼ら自身の内にある無知の為に、その心の頑なさのために、私的な理解の点で、影に覆われて暗くなり、神の命から疎遠になっている」

とあります。1世紀のエフェソには、豊穡の女神アルテミスを祭った、壮麗な大アルテミス神殿がそびえていました。そこでは神殿売娼が行われていました。町全体が影響を受け、人間の本能に訴えた、退廃した考えに人々は酔いしれていました。

その事について19節に、  
「無感覚になって放縦な生活をし、あらゆるふしだらな行いにふけてとどまるどころを知りません」

と記されています。そう言う生き方は、如何に空しいか、その原因は、神様に背いて、キリストを知らなかったからでした。しかしキリストを知り、キリストに結ばれてからは、

『全ての真理はイエス様の内にあり、あなた方はそれを学んだ筈です。今や真理を知っているのです』

とパウロはその自覚を促しています。22節に、  
「だから、以前のような生き方をして情欲に迷わされ、滅びに向かっている古い人を脱ぎ捨て」  
と勧めています。

人間は本来、変化を恐れます。長く着慣れた服は体になじんで、捨てがたいものです。

『捨てるなんて勿体ない。

だから重ね着をしよう』

と言うことになります。わたし達も長い生活習慣、生育歴の中で身につけてしまった考え方や、生き方から抜けられない者です。私たちは放縦な思いでなくても、差別や偏見、表面的判断など、イエス様の真理から逸れる考え方や、人を計る物差しを持っています。パウロはそれが、

『キリストに結ばれる前の、古い人だ』

と言って、古い人を脱ぎ捨て、23節に、

「心の底から新たにされて」

と勧めています。

「心の底から新たにされる」

それは、決して自分で出来るものではありません。自分で成ろうとする努力は、

『古い服が体に張り付いていて、ことある毎に罪の根として出て来るので』

新しくなる事は出来ないのです。

『心の底から新たにされる』

それは、自分の力ではなく、聖霊の力によるものです。

24節に、

「神にかたどって造られた新しい人を身に着け、真理に基づいた正しく清い生活を送るようにしなければなりません」

とあります。これこそ、聖霊の内住なしに出来る事ではありません。それが具体的にどう言う生活かが、25節から、新しい生き方として、示されています。

「だから、偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。わたしたちは、互いに体の一部なのです」

とあります。わたし達は教会内で、嘘偽りを言っているという思いはありません。しかし、

『良い顔をしたい。良く見て貰いたい。』

そう言うことはあるのではないのでしょうか。神様の前にいる思いで、どんな人とも同じ心で接すると言うことは難しいことです。時に相手によって、ぞんざいな言葉や態度になってしまいます。それは相手を互いに、キリストに連なる部分、一つの体としての意識が無いところから出てきます。いつも自覚しておきたい事は、キリストを頭とする一つの体に、共に連なっている事を忘れないことです。

26節に、

「怒ることがあっても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで怒ったままではいけません。悪魔にすきを与えてはいけません」

と勧められています。イエス様は祈りの家である神殿を、営利の場、強盗の巣としていた商人たちに、怒りを発せられました。正しい怒りは必要です。しかし、わたし達の多くの怒りは、自分の利害が侵害されることではないのでしょうか。双方、自分が正しいと思い込んで、怒って居る事が多いのです。そのまま放置すると、怒りは

憎しみに変わって行き、それは自分自身を毒する罪となります。悪魔が喜ぶばかりです。

マタイの5章23節には、

「あなたが祭壇に供え物を献げようとし、兄弟が自分に反感を持っているのをそこで思い出したなら、その供え物を祭壇の前に置き、先ず行って兄弟と仲直りをし、それから帰って来て、供え物を献げなさい」

と勧められています。自分の方から、仲直りを申し入れることです。それが罪を撃退する最良の方法です。

エフェソ4章29節には、

「悪い言葉を一切口にしてはなりません。ただ、聞く人に恵みが与えられるように、その人を造り上げるのに役立つ言葉を、必要に応じて語りなさい」

とあります。

「ことばのけしゴム」という詩を紹介します。

『えんぴつで かいた字は けしゴムできえる  
こくばんにかいた絵も こくばんふきで けせる  
口からでてしまったことば けすけしゴムないんだね  
とりだせないんだね

きみの取こささった ぼくのことば 忘すれられないよ  
ぼくのむねにささった きみの目

ことばをけす けしゴム あったらなあ」

(なかのひろ詩集「とうさんのラブレター」  
銀の鈴社)

何気なく言った言葉で、相手をどれ程傷付けているか分かりません。わたしたちは、自分に掛けられた言葉には、敏感に反応しますが、自分が発した言葉は、直ぐに忘れてしまいます。

ヤコブの3章2節には、

「言葉で過ちを犯さないなら、それは自分の全身を制御できる完全な人です」

とあります。聖霊の導きを求め続ける以外にありません。わたし達はお互いに過ち多い者です。

エフェソ4章32節に、

「神がキリストによってあなたがたを赦して

くださったように、赦し合いなさい」

との御言葉に従って生きていたいものです。わたし達は如何にして、古い人を脱ぎ捨て、新しい人を着ることが出来るのでしょうか。それは、聖霊を心から求め、聖霊の内住と、聖霊に主導権を全てわたす事です。

30節には、

「神の聖霊を悲しませてはいけません。

あなたがたは、聖霊により、贖いの日に対して保証されているのです」

と宣言されています。何と祝福に満ちた約束でしょう。わたし達自身には、神様の御心に適う様なところは何一つありません。そんなわたし達をキリストの体とする教会に連らせ聖霊に依って一つとなし、一人ひとりに聖霊を内住させ、聖霊が教会の成長と共に一人ひとりを成長させ、神の国まで導いて下さるのです。既にキリストに贖われ、キリストに属するものと言う証印が押されています。わたし達はその自覚こそ、確かに持つべきです。そして直すら聖霊の内住と導きを求めて、キリストの体として成長して行くこと、教会を建て上げて行くことに、励んで行くではありませんか。

お祈りを致します、  
恵み深い天の父なる神様

罪深い私達に、イエス・キリストの御救いを与え、キリストの身体なる教会に連らせて下さり、有難うございます。

わたし達は、この大いなる召しに、ほど遠い者ですが、聖霊が一人ひとりに内住して下さり、教会に霊の一致を与え、教会が更に成長し、神様の御名を讃えることが出来るようにお導き下さい。

愛するお一人お一人にこの祝福を御注ぎ下さい。

尊い救い主イエス・キリストの  
お名前によってお祈りをいたします。

アーメン。